種別	性別	調査人員	解答シ得タル者	百分比
赤	男女	四七五八	四七五八	一〇〇〇〇一〇〇
鶸	合計	一	一	七、一
浅黄		×	×	×
桃		一三六	一九九	九八二、九九
樺		一二一	八五七	八六一、七一
紫		一一六	七八八、六	八八二、九
緑	女男	一四八	六九	四五二〇、〇

種別	性別	調査人員	解答シ得タル者	百分比
鶸	女男	四七五八	二	四、三
浅黄		二	×	×
桃		一三四	六八六	六、〇
樺		四二二	五一一	五、一
紫		二八九	三七九	五九六
緑		九六	一九一	七七、二
黄		七二	七八七	七二、四
青		八九	一七五	一五、〇

きかぬ子

倉橋惣三

一

この子は『きかぬ子で』といふ意味には隨分いろ〳〵の場合が含まれて居ります。しかし之れを要するに、きかぬ子は人のいふことをきかぬ子でありまして、換言すれば自己主張の強い子供といふことになります。きかぬ子の研究は子供の自己主張の研究であります。

ところで、自己主張の強いといふことは、之れを正面から論ずれば素より立派なこと、子供に養成せらるべき性質として最大切なものでありま

す。知能が優れて居ても、感情が美しくても、また身體は強くとも、自己主張の力の弱い子でありましたら、到底眞に尊敬すべき性格の人とはなれないのであります。實用的にいへば世に役に立つ人とはなれません。道德的にいへば吾々の信賴し得べき人とはなれません。古來少しでも世に益をなし、或は道德的に偉大なりし人は、皆一と廉の強い自己主張を有して居た人であります。主張せられた自己の內容、其の自己を主張する形式に於ては種々さまゞ〳〵であるのみならず、時には甚だ非自己主張の樣に見える場合もありましよう、しかしそれとても心理的には矢張り強き自己主張であります。一世の俗論に反して眞理の爲に身をすてた學術上、宗敎上の殉敎者、國難に身を捧げて自ら死に赴いた愛國の士の如き、道德上の種類からいへば、自己より以上のものゝ爲に自己をすてたといふことになりましよう。けれども何故その人々がそういふ勇敢なる自己放棄を敢てし得たかといふ心理的理由に遡れば、その如く眞理を貴び、その如く國を愛し得るように、先づ強い自己主張を有して居たのであります。斯る壯烈なる行爲のみでなく、日常普通の生活に於てゞも善人は決してお人よしではありません。東から風が吹けば西に靡き、北から水が流るれば南に漂ふといつた樣な、たゞ人のいひなり放題になつて居ることが決して眞の善人ではありません。たゞそんなものが無我であり捨身であるとならば善人程たよりにならぬものはありますまい。愛は己れを損てるなりといひますが、身をすてゝこそ活くるなりけれで、それこそ單に最强なるのみならざる最高なる自己主張でありますまいか。また斯うまで推しつめた最高標準で考へませんでも、滔々として利に聰き輕佻の世に立つて、儼然として獨り俗流に逆らふといふ樣な必要のある場合、諸士が心中一

片耿々の節義を持するものも亦、堅固なる自己主張に他なりません。福澤翁の彼の痩我慢の説の如き、また詩人ドライデンの句だと覺えて居りますが、所謂ノーブル、スタッボーンネス（尊敬すべき頑固）の如き皆これ「きかぬ氣」の高尚なものであります。而して之れが子供の時にも存して居ります。成る程孫を玩具の樣に思つて御座る祖母樣や、生徒を土偶の樣に心得て居る先生からは、不從順だとか可愛氣が無いとか不評判でありませうけれど、心性の中々しつかりとした子供がありません。口數の少ない、併し一旦ものを言つたらイエースとノーとの區別のはつきりとして居る、一々小さい事に人の干渉を受けるのは嫌ひだけれども自ら守るべき丈けのことは守るといつた風の子供が男子でも女子でもあります。かういふ子は子供ながらに自分の主張といふものが――理屈からでなく性格から――ありますから、自然負け嫌ひといふ形になつて外にあらはれます。そのあらはれ方に上品下品、大きい小さいのいろ〳〵はありますが、その手ごたへのある勝氣な處は、その將來にたのもしい性格であります、或はヒンチメンタルな情緒生活や、頭ばかりが先へ〳〵働く才智生活の跋扈し勝ちな當世に、子供の性格を一點斯くの如ききかぬ氣のものに敎育してゆくことは極めて大切なことであります。

處がきかぬ子といふ言葉、は斯ういふ正當なる自己主張の意味のみには用ゐられて居りません。うちの太郎は中々きかぬ奴で面白いと言つた樣によき意味に用ゐられることは甚だ稀でありまして多くは、うちの二郎のきかぬ子には困りますと言つた風の、よくない意味に使はれて居ります。といふのは、どんな子供達のことなのでありませうか。

二

惡い方のきかぬ子は曲つた自己主張でありますよく頭の頂へ指を立てゝ、それを前へおろし、眞直ぐに鼻のすぢへ當ればよし、それが横へそれゝばつむじ曲りか鼻曲りか、兎に角、根性の曲つた子だと言ひます。斯ういふ樣に身體の中軸の線の眞直ぐでないことが、如何なる具合に精神と相關係して居るものかは知りませんが、何しろ心の動き方の、眞直ぐでないと形容すべき子供は澤山にあります。無形なる心の動き方を眞直ぐとか曲つて居るとか言ふのも可笑しなことでありますが、同じ自己主張でも、その平衡がとれて居ない處は心が曲つて居るとしか思へないのであります。

而して自己主張の平衡のとれて居ないといふことには、先づ二つの種類があります。その一つは主張すべき自己そのもので正理の平均を失つて、或る偏倚の狀態にある場合であります『わからずや』といふのは、此の偏倚を正すべき正理の調整を失つて居るといふ意味であります。『我意を張る』といふのは、自己が自分の重味によつて一方へ偏倚して居るといふ意味であります。『頑固』といふのは自己が偏倚したるまゝに動かすべからざるやう固着して仕舞つて居るといふ意味であります。いづれにしましても、此の種のものは主張すべからざる事を主張して居るといふ、理知上の誤に陷て居るのであります。之れは思慮判斷の資料の未だ少ない子供にあつて當然起りさうなことで、譯の分つた成人の目から見て愚昧だとこそ思へ、一方には無理もないことゝも思へるのであります。老年の頑固は今更如何とも出來ないかも知れませんが、子供の『わからずや』は多くは分別の發達と共に次第になほつてゆくものであります子供は人間一代の進化からいへば丁度野蠻人の狀態に居るものであります。成人から見れば可憐なる無智であると共に、暫くは容易く歸順させ難い

きかぬ子であることも已むを得ません。斯ういふきかぬ子は手には餘つても憎氣はないものであります。

然るに第二の種類は、自己そのものゝ誤りよりも、主張の仕方から起るきかぬ子で、之れにまた二つの種類があります。その第一は主張の內容の貫徹よりも、主張そのことから生ずる快感を追求するもので『わがまゝ』といふのが多く之れであります。くだらない小さなことに迄、自分の主張が人に勝たなければ心持が惡いといふ一種の病的な習慣性な誇大妄想式な氣分から起るものであります。その第二は必ずしも常に勝を制せんことを索むといふ心持がもとになつて居るのではありませんが、相手の出かたによつて、其の場々々、ちよい〳〵と逆つて見度くなるのであります。必ずしも反對の主張が豫め存するでもなく、反對を徹し終へようとするのでもなく、寧ろ心中には贊成であり、またどうせ贊成する積りでは居りながらも、逆つて見るといふことに抵抗の快感を有するもので『意地曲り』といはれるのが多く之れであります。彼の地中に居ります「あまのじやこ」といふ虫の脊が丁度棒か何かで打たれた痕の樣に腫れ上つて居ますのは、此の虫一つがお釋迦樣の言ひつけに背いて右といへば左、左といへば右へ行つた爲に罰せられたのだといふ傳說から、中國邊では、斯ういふ種類のきかぬ子のことを「あまのじやこ」と申して居ります。

第一の種類に比べて、第二の種類のきかぬ子は餘程怪しからぬ性質のものであります。如何にも憎らし氣に感せらるゝものであります。取扱ひの上から、困る、手に餘るといふよりも、もう一歩進んで其の心狀が忌はしく思はれて來るのであります。從つて斯ういふ子供達に對する吾々の態度は、餘程苛酷なものになり勝ちであります。しか

し成人の場合に於ける斯ういふ所業と、子供の場合とは、一つ並に見做すことは出來ません。即ち子供の場合にはまた特殊なる解釋を待つべきことが多くあるのであります。そこで、きかぬ子の原因調べが必要になつて參ります。

三

正當なる自己主張の強いといふことゝ、徒に勝を制することを快しとすることゝは、似て非なること甚しきものであります。前者は意志の固執性の順當なる發達でありまして、後者は感情の病的なる執拗であります。『強情』即ち情の硬い子といふ言葉はよく其の當を得て居ります。意志はどこ迄も自己を徹して行かうとしても、情の方で之れを和げてゆくのが普通であります。それを強情な子の場合には情の暴虐的滿足が勝つて居るのであります。御承知の樣に、意志の作用には推進的な作用と、抑制的な作用とがあります。強情なる子供の場合には、此の推進的意志力が必ずしも強いのでないのみならず、抑制的意志力の甚が弱い場合が多いのであります。即ち意志の弱い子が却つて屢々強情であることがあります。而して斯ういふ強情が何故募るかといふ原由を索ねて見ますると、二つの反對なる條件から起つて參ります。其の一つは主我感情の過度に放肆なる滿足から增加的に起ります。他の一つは、その反對に主我感情の滿足の不自然なる壓迫から反動的に起ります。前者は甘やかし子に見る例、後者は虐待兒童等に見る例がそれであります。甘やかされてのみ育つた子が、從順即ち正當なる自己抑制の訓練に就て受くる處がなく、言ひ換ふれば適當に自ら己れを管束してゆくといふ抑制的な意志力が缺けて居る爲に、止め度もない強情を募らせることは、明かなる理路であります。恩愛はあつても思慮のない親達は、此の意味に於て子供をきかぬ子に拵へ

上げて仕舞ふのであります。此の反對に、餘りに嚴しい干渉や、薄倖なる境遇上の關係やから、ついぞ自己といふものを正當に主張することもなくしかも心の內面には、むら〳〵として自己主張の慾望が強いとすれば、偏屈なる、陰險なる、妙にひねくれた對人感情に變質してゆくことは、之れ亦是非もないことであります。人は皆自分を抑壓するもの、自分に邪險なものといふ考へが根强く心に出來て仕舞へば、そういふ子供の心は屈服か反抗かの二つになります。處が事實は純粹の屈服と堂々たる反抗との中間性のものになります。意地曲りのひねくれ根生といはれるのがそれであります。生れるとすぐ親には捨てられ、社會からは忌み嫌はれて、他人のやさしみを受けたことのない放浪少年などが、妙に偏執な反抗的な共通性を有して居ますことは、此の顯著なる例證であります。卽ち斯くの如きは自己主張といふよりも、實は甚だ消極性なもので、自己防衛といふ方が勝つて居るのであります。なにくそつと意地張つて來る處は、一見如何にも强い性格の樣に見えますがその實、負かされまいとする弱者の意識に基いて居るものであります。『得意の頭は低い』と申しますが、その反對に人から侮られはしまいかといふ樣な弱味のある時には、却つてくだらない事にも人に凌がれまい人に乘せられまいといふ無理な態度になるものであります。斯くの如く境遇の上から自己防衛の情の過度に强くなつて居る子供が、一種の强情兒になりますことは、敵の前の針鼠の身體が硬くなる樣に、いはゞ生物學的に自然な現象であります。此の意味に於て愛の足りぬ成人は子供をきかぬ子にこじらかして仕舞ふのであります。

次にこま〳〵しい抵抗の快感に基く意地曲りも亦周圍の人の仕向けによつて作らるゝことがあり

ます。始終抵抗のやはらかい取扱ひを受けて居る子供は、すら〳〵とした自己主張の經驗のみをして抵抗を感じません爲に、一々の小さいことに迄自己を意識する樣なことは無いのであります。從つて温順な素直な心柄に作られます。その反對に親が心の粗つぽい人間であります場合には、之れに對する子供の心は始終抵抗を感じて居りまして終には抵抗が常性になつて仕舞ふのであります。バッテン、キーゼル氏は昨年の研究に、子供の意地曲りは傳染すると言つて居りますが、實際親の意地曲りが子供に傳染して居る場合は屢々實例に富むことであります。私共は此の意味に於て、きかぬ成人が、『きかぬ子』を作ることを警むべきなのであります。

四

以上は教育の誤りから出來た『きかぬ子』であります。併し、子供の自己主張が亂調になることはもつと必然的に、即ち純心理的理由及び純生理的理由からも起るのであります。純心理的理由といふのは、子供の或る年齢に於ける主我感情の興進であります。子供に主我感情の最も強い時機は凡そ三度あります。第一は三四歳頃の、純本能的な主我生活であります。之れは詳しき説明を要しますまい。次には十歳前後の強烈なる自己發揮であります。此の時期は鬪爭的感情の最も盛なる時でありまして、遊戯に於ても競爭性のものが最も好まれ、秀逸を爭はんとする心が事毎にあらはれるのであります。第三に十六七歳即ち青年期初期に於ける主我感情は所謂自我覺醒期でありまして、少年期の主我性の謂は〻動物的なるに對して、精神的なるものであります。たゞ徒に勝を競ふといふのではなく、從來盲目的に依從し來つた自己以外の一切の權威に對して、覺醒せる自我意識が反抗して來るのであります。斯くの如く三つの時期

に、それ〳〵性質の異つた主我性があらはれますに連れて、それ〳〵の性質の一時的きかぬ子になることは免れないことであります。素より子供によつて其の強弱の程度の差はありますが、うちの子は此の頃なんだか急に『きかぬ子』になりましたといふお母さん達の不審や、何年級は何故だか手に負へない『きかぬ子』揃ひだといふ先生方のお困りなどは、此の心理的一般原則によつて大體解明せられるのであります。そして、その時の強情が惡い癖となつて後まで殘らない限り、之れは自然になほるものであります。

それから生理的原因としては俗に所謂『氣むづかしい』と稱せらるゝ種類の『きかぬ子』の多數に於て見る事實であります。生理上の異常が如何にして精神上に影響を及ぼすかといふ理論的の話は別として、此の事實は疑ふべくもありません。過度の疲勞、殊に睡眠の不足、內臟の不健康、わけても胃腸の疾患、及び肝臟の病氣、感官の障碍、就中鼻や耳の故障、斯ういふ純生理的障碍から精神が非常に影響せられるのであります。疲勞の結果は、一方には意志の抑制力を減じ、一方には感情生活を荒涼ならしめて、茲に申し分なき『氣むづかしや』が出來上ります。之れは必ずしも常性的のものでなくとも、寐足りない子の醒めぎはの不機嫌は極く普通なる例證であります。どうとかした譯で此の疲勞が直に恢復せられず、その上へ〳〵重なつてゆきますと終には慢性的な『氣むづかしや』になつて仕舞ひます。消化機や肝臟の疾患が所謂有機感覺に影響して、氣分の變化を起すことは吾々でも始終經驗することであります。鼻や耳の故障が直ぐに腦の方に關係を有して、從つて性情に大關係のあることは、近來學童衛生の問題中最も注意せられて居ります。其の他齒痛であるとか、眼病であるとか、些々たる故障であり

ましても氣分の上に影響して、いら〳〵した心持になります。そのいら〳〵した心持から、いつもならば何でもないことにまで機嫌を損して、平常にも似ぬ『きかぬ子』になります、斯ういふ風な原因から出來て居る『きかぬ子』の匡正が、身體上治療から先づ初められなければならぬことは、言ふ迄もありません。しかし此の明瞭なる先後か誤まれて居る場合も少くないのであります。殊に昔から子供の癖といふ漠然たる言葉であらはされて居る子供の不機嫌に對する取扱法などは屢々間違をされて居るのであります。

五

以上は『きかぬ子』の種類、原因の事實上の說明であります。次には多少評價の目から、もう少し細かに異同を考へて見る必要があると思ひます。

その第一は所謂『負けぬ氣の』大小二種の區別であります。之れは寧ろ性格の大小別に歸するのかも知れませんが、外見屢々混同せられて居ることがあります。又其の評價が顚倒されて居ることさへあります。大石藏之助は際限なく大きな負けぬ氣でありました。その爲に性根無しと見られて居りました。村上喜劍は如何にも武士根性の華の樣に見えました。併し、その實は小さい負けぬ氣でありました。子供にも甚だ慷慨悲憤的に、小さなことに負けぬ氣を小出しして居るのがあります。又一見極めて平氣の樣に見えて、その實は大いに己を高うし、自己を主張して居るのがあります。後者の大度大量は子供ながらにも畏敬の念を起すのに對して、前者はチク〳〵とめまぐるしい、またかと言つた風に、强さも何にも感じ得なくなるのであります。成人にも斯ういふ人がありますがくだらない小さなことに直ぐ刺戟を受けて、一々少しでも負けて居られないのであります。一寸人と話をして居りましても、一言一句に自分の考へ

を立てゝ行かうとして、『だけれども』『ですが』といふ樣な種類の言葉を續出して對手の言ひ分を一つ〳〵抑へて來る人があります。また正面からそう露はに出られない場合には、何とか彼とか、効果もない捨臺詞を放つて、自分だけ滿足して居る人があります。大局に於て自分の主張なり尊嚴なりが損せられなければ、部分々々はどうでもいゝといふ樣な悠容たる態度を以て、よく人の言を聽いて居る人々に較べますと、同じく『負けぬ氣』に斯くも大小があるかと思へるのであります。もう少し大きなことにしても、何かといへば主義主張を持ち出して些細のことに我を張り通して居る人があります。さうしては憚りながら骨が御座るといつた樣のことを得意として、人もさう許して居ることがあります。成る程骨はありませう。しかし骨も小骨では厄介至極であります。骨は大骨でこそ貴いのであります。それが小骨ばかりで大骨が無いのだつたら此位つまらないものはありません。又大骨は大骨であつても小骨は甚だ迷惑千萬であります。

第二は自主性の負けぬ氣と、對象的な負けぬ氣との區別であります。之れもやがては大小の別とも見られるかも知れませんが、又多少見方を異にして居ります。自主性の負けぬ氣は、對手の如何といふことが何等の關係を持つて居ないものであります。道理そのもの、前にとか、正當なる權利の擁護の爲にとかいふ自主的理由からの負けぬ氣であります。然るに對象的のものとなりますと、對手といふものが大に關係を持つて居る許りか、一層極言すれば對手から支配せられて居るのであります。對手たる人により、又は對手の出方によつて、言ひこじれて行くとか、一寸すねて見る、何とかひねくれて見ると言つた樣の場合であります。終には自分の主張そのものはどこへか行つて

仕舞つて、たゞ對手に當るといふことだけに氣を奪らるゝに至ります。當人の心では對手を制して居る積りでありませうが、事實は對手から制せられて居るのであります。殊に人の惡い對手にあへば識らず〳〵釣られて居ることさへあります。

六

以上考へて來ました『きかぬ子』の種類、原因、異同等によつて、其の教育的取扱ひ及び指導上の注意はおのづから明瞭であります。しかし更に極めて實際的に考へて見ますならば、『きかぬ子』の取扱方の要訣は二つになります。其の一つは所謂『柔よく剛を制す』の秘訣にあります。どの種類、どの原因でありましても、『きかぬ子』が其の本領を發揮して、吾々の手に餘るといふ場合は、其の自己が主張せられて居る時であります。つまりは自己が他の自己に對して抵抗の狀態に居る時であります。そこへ何の彼の手を加へて益々抵抗の感じを大にしてゆくことは、却つて彼れの主張を募らせる所以であります。こちらの抑壓が強い爲に、假りに已むを得ず其の場合だけ主張を撤回しましても、どこかへ其の餘勢を漏さずには終りません。さうすれば表面は制し得ても、實は一層惡い陰性の『きかぬ子』にするのであります。と言つて其のいふなり放題に一々從ふといふことは、『きかぬ子』を益々募らせることになります。そこで或る人は『リーブ、アローン、メソッド』と申して居りますが、つまりそつとして置いて、其の抵抗を無くすることが一番の法であります。『むつとして出づれば門の柳かな』、彼れもおのづから和がざるを得ないのであります。但し、之れは秘訣といひましても、人わるく、子供をだますといふのではありません。こちらのやわらぎを以て、ふつくらと彼れのつつぱつて來る主張を受けるのであります。私共は子供の自己主張に對して、大人氣

もなく自己を主張し返して、互に鎬を削りあつて居る親や先生を見ることがあります。又子供の強情を撓めようとして、却つて抵抗のお相手になつて、之れを募らせて居るのを見ることもあります或はまた愛の足りない、たゞの巧者から、うまく子供をあやなして、其の場は成功しても實は子供を人わるにして居るのを見ることもあります。之れ皆『きかぬ子』の本質を明かにしないから起る誤りであります。

第二の要訣としては、上に述べました處では良き意味の『きかぬ子』と惡き意味の『きかぬ子』とは截然兩つに分たれて居るかのように見えますが、之れは抽象した分解的なお話で、事實は、さう區別せられて居るものではありません。良き意味の『きかぬ子』にも、惡き意味のものになる傾向あり惡き意味のものも良い意味のものになり得る傾向を有して居ますので、きかぬ子を全然惡いもの扱ひするのは大きな間違であります。『きかぬ子』が素直にはなつたけれど、張りも意地もない意氣地なしになつたのでは臺なしであります。小さい、對象的な『きかぬ子』は無くなつて、大きい、自主的な、良き『きかぬ子』を作られなければならないのであります。

森の幼稚園（六）

S K 生

八、新茶